

ヨハン・ゴーリッツのコリュキアナ、アンジェロ・コロッチのアカデミー、 ルドヴィーコ・ラツザレツリ「蚕の詩」——ルネサンス思想圏と世界

根 占 献 一

はじめに

旧本務校だったこの女子大学紀要に本稿を執筆するにあたって、先ずは在職最後の年（二〇一九年四月～二〇二〇年三月）に刊行した小著『ルネサンス文化人の世界』を思い起こしたい。それは文化世界の哲学的、宗教的思想の交錯や影響を描写しようとしたものであった。四年目を迎えているが、本論のスタイルも変わらない。

ここに名が出る人物たちはルネサンスという時代に属し、様々な人間交際、文化交流のなかで時代を生きていた。表題には三人の名しか出ていない。生年順に並んでいるわけではない。また登場する者はこの数に限っていない。登場しなくてもその名（「顔」と言いたいところだが）が浮かんでくる者たちにも事欠かない。行論は各人の注目に値すると思われる点を書き連ねることになる。それらがこの時代固有の特徴として映ずるように努めたい。

当該者が歴史の渦中であって眼前の事象に捉われている時でも、後世から見ると、それはより大きな文化や思想の世界圏のなかで生ずる連関となり、影響の限らない広がり気づく。文化・思想圏は同時代の生者間のみならず、彼らに先行する古代・中世の哲学・神学や学芸に従事した人物をも含んでいる。そのような圏内に彼らの歩みを位置付ける試みが後世の精神史家に課せられる。

（一）教皇の町ローマと新動向

小著ではフィレンツェ共和国の他、都市ローマと教皇庁にかなりの記述が注がれた。メディチ家が姻戚関係により、教皇庁との関係を深め、枢機卿からついには教皇まで出す家門となり、ローマに進出したことが大きかった。イル・マニフィコと称されるロレンツォ・メディチは妻をローマの貴族オルシーニ家から迎え、また夫妻の間に生まれた男女のうち女子のひとりをも教皇インノケンティウス八世の家門（チボ家）に嫁がせた。男子からやがて教皇がレオ一〇世として誕生するのは時間の問題であつたらう。インノケンティウス八世の前はメディチ家と対立したシクストゥス四世（デッラ・ロヴェレ家）であり、インノケンティウス八世の後には、スペインはボルジア家の出であるアレクサンデル六世であつた。アレクサンデル六世は両世紀にまたがっているが、これら教皇の在職期間は決して長くなく、しばらくは一六世紀に入ってからその状況が続いた。それは一五世紀の七〇年代から一六世紀の二〇年代までに相当する期間であつた。

一五二〇年代のメディチ両教皇の間に外国人教皇ハドリアヌス（アドリアン）六世（一四五九・一五二三）が選出された。一五二二年一月のことであり、同年八月末日ローマで教皇冠を被つた。外国人教皇は珍しいことでなく、すでにアレクサンデル六世の名をあげた。出身のボルジア家はこれ以前にも一族から教皇が出ており、イタリア半島の教会行政に知悉しており、「国内」的一門であつた。世紀がさらに

一四世紀になると、アヴィニヨン時代となってフランス人教皇は当たり前だったので驚くことではないかもしれない。

だが、教皇が安定的にローマに住み始めて百年ほど後にローマにかなり異質な新教皇が誕生したと受け止められることになった。余りにもあつげなく終焉を迎えたものの、それでも記憶に残り続ける教皇となった。二〇世紀後半に入り、第二ヴァティカン公会議後十年余りが経過して、ポーランド出身の非イタリア系教皇が登場する七〇年代末まで、外国人教皇の再登場は持ち越されたのである。「最後の外国人教皇」と呼ばれ続けたオランダ人ハドリアヌス六世は、こうしてヨハネ・パウロ二世（在位一九七八・二〇〇五）が登位するまで四五〇年余り教皇史上に異例な存在となった。

ハドリアヌス六世伝を書いた歴史家は、期待されたカトリック改革が早々と壁に突き当たったものの、短い在位中、教皇が見知らぬスペインからの巡礼者の頭（しんぎ）に祝福を与える文で最後を結んでいる。一五二三年三月二九日棕櫚の日曜日のことで、もちろんこの人物はイグナティウス・デ・ロヨラを指していない。教皇は半年経たぬ間に死去することになる。同様にスペイン出身ながら、無名だったデ・ロヨラに対し、教皇の相談相手となる「進歩的」ヒューマニスト（人文主義者）にファン・ルイス・ビベスがいて、ヨーロッパ中に名を馳せていた。教皇と故郷を同じくするエラスムスもまた忠告者であり、ビベスとは近しかった。

一五二七年、メデイチ家出身二番目の教皇クレメンス七世在位中、「ローマ劫略」(Il sacco di Roma)の事態となり、カトリック社会には戦慄が走る。小著の書き始めから歴史的問題として明瞭に「ローマ劫略」が認識されていたわけではなかった。数々の資料を知り、研究文献を介して、この出来に文化人たち（しゅぶんた）、当時の用語で言えば、ヒュー

マニストが巻き込まれる運命を多方面で指摘しなければならぬほどの重大性を帯びていた。多事多難は歴史の常であるにしても、このローマ劫略は分けても高い象徴性に達し、語り継がれていくことなる⁴。すでに起こっていた所謂宗教改革にその発端があったろう。ルターの改革思想はイタリアにも流入し、影響を与えていた。小著はこの視点にも少なからず注目したが、今回は主にカトリック側の叙述に留まるだろう。それはまた対象となる人物たちにヴァティカン関係者が多いことにもよる。

三〇年代に入つて、ファルネーゼ家の出であるパウルス三世（一四六八年生まれ）が教皇位に就くと、新たな動きが次々に現われ始めた。ハドリアヌス六世と遜色ない、かなりの高齢で登位したため、それまでの教皇たち同様、短命で終わるものと期待された。だが、豈図らんや「一五年」にも及ぶ（一五四九年死去）とは、ということになり、カトリック改革が前進を見た。好学の士であり、自らがヒューマニストであった教皇の姿勢が反映され、宮廷文化が華やかに営まれ、学識が見込まれた者が側近となった。フランチェスコ・ベツリーニはそのひとりで、パドヴァ大学では哲学者ピエトロ・ボンポナツィを師と慕った。またベツリーニはピエトロ・ベンボと近しかった。後述するアンジェロ・コロッチも教皇から愛顧を受けたが、ヒューマニストとしては一流だが、宗教人としては平凡、と高名な史家から判定されている⁵。ヒューマニストたちのなかには宗教倫理の高い有識者たちがいて、コロッチと違い、改革派として活躍する場が与えられた。

トレント公会議（一五四五・一五六三年）が開始されたのは、このパウルス三世からであった。トレント公会議は決定的に時代を画し、公会議前のハドリアヌス六世のような外国人教皇を生む余地は潰え去つたように思われるものの、同公会議中、英国出身のレジナルド・

ポールが選出される可能性が高まった。ただコンクラーベで捷利を得られなかった。イタリアと外国人の関係を一律的に処理するのは難しい。ヘンリー八世の側近で高位聖職者ともなるポールは、若くしてイタリアに遊び、パドヴァに学び、ヒューマニストの友人たちにも非常に恵まれていた点で、世代も古いハドリアヌス六世とは異なる。ポールの支持派、時に霊的な人々（スピリトゥアリ）と呼ばれるが、彼らが目指した方向はまたデ・ロヨラとも異なっていた。

デ・ロヨラとその仲間たちが新修道会、イエズス会として公認されたのもパウルス三世の時であった。同教皇時代には新大陸原住民のみならず、アジアの風土、住民事情も次第に明らかになった。特にわれわれの視点からは日本が「発見」され、イエズス会によりキリスト教が日本に伝播したことは世界的観点から重要である。同会を導くデ・ロヨラはイエルサレムを基準に他の仲間同様、行動する生を送っていたが、最後はここローマを定点にし、いわば自らが「不動の動者」たることにより地球上の新旧大陸に派遣される修道士たちとの交信に務めた。それはローマ劫略から一〇年後のことである⁷。こうしてイエズス会とともに、古代ローマの歴史的官職、最高神祇官 (pontifex maximus) の名を恣にする教皇のいるローマに新たな歴史の命が注ぎ込まれることになる。

(二) ルクセンブルクの人ゴーリッツとサンタゴステイノ聖堂

ローマ劫略の顛末では特にローマ在住の文化人の浮沈が明暗を分けた。サンタゴステイノ（聖アウグステイヌス）聖堂での文化活動で知られるルクセンブルク人、ヨハンネス（ヨハネス）・コリテイウス (Johannes Coritus) とヨハン（ハンス）・ゴーリッツ (Johann [Hans] Goritz) はそのひとりであった⁸。ゴーリッツは教皇アレクサンデル

六世下のローマ教皇庁で働き始め、その難に直面する聖職者だが、交友関係者たちから詩を捧げられた『コリュキアナ』(Coryciana) で知られている。仲間の聖職者プロジオ・パツラディオによる『コリュキアナ』刊行は一五二四年となる。稀書であるが、研究者たちの関心は途絶えず、最近ではフランスに新版が現われ、注目される⁹。

サンタゴステイノ聖堂内にはイタリアの教会らしく見るに値する作品が多いのだが、ここでは関連ある彫刻と特定のフレスコ画を話題にしよう。聖アンナと聖母子の「三位一体」はアルプス北側からイタリアに流入した崇敬の現われと言われる。中世末からルネサンスにかけてマリアの母アンナへの関心が高まっていたのである¹⁰。サンタゴステイノ聖堂にはアンドレア・サンソヴィーノのこれらの「三位一体」彫刻作品が置かれていた。『コリュキアナ』には彼女たちを讃えるために、古代ローマの高名詩人たちに見紛う詩行が使われている。異教とキリスト教の問題は芸術的に昇華されている観があり、調和を保っている。ルネサンスに発見された「唯物論者」ルクレティウスの詩行引用も研究者によって指摘されているために、彼らの邪気のなさを知る。そしてこれらの発現は、異教の学芸に理解を示すメデイチ教皇時代なればこそとも言いうるのである¹¹。

サンタゴステイノ聖堂はアウグステイヌス隠修士会の長エジディオ・ダ・ヴィテルボの司牧の場になり、エジディオは同一修道会に属しているルターの上長として、北方の同会士がまだカトリック修道士身分でローマに来た時に会っていると考えられる¹²。同聖堂はナヴォーナ広場を挟んで、体を振った半身像バスクイーノのいわば反対方向にある。バスクイーノに時代批判の詩文が貼り付けられたのに対し、聖アンナ像には前述したように宗教的、文化的嗜好があらわにされた。毎年七月二六日の彼女の祭日を同聖堂で祝った。

『コリュキアナ』圏には興味深い人物たちが現われる。後にルター支持に廻るウルリヒ・フォン・フッテンの名がある。詩行には実はルターの名も現われる。アルプス以北の地とイタリアを比較する視点も欠けてはいない¹³。ローマの魅力は大きく、ゴリッツのごとき外国人が「第二の祖国」、「共通の祖国」(Patria communis)で活躍し、フランス語圏出身のクリストフ・ドゥ・ロングイユがこの歴史的都市で名を馳せる機会を訪れる。ドゥ・ロングイユに見られるように、ローマ市民となることは羨望の的であったが、いずれの地域までがローマ市民となるかは、ローマがかつて領したガリアに含まれるかどうかで議論が分かれることがあった。この文脈で同じ一六世紀の日本からの使節、天正遣欧使節一行がローマ市民となったことを思い出しておきたい¹⁴。「近代ローマの地理的拡大」により「ローマ人」も、未知だった大陸や神秘に包まれていた旧大陸にも及ぶようになった。

ハドリアヌス六世がゴリッツやドゥ・ロングイユ同様に北方人でオランダの出であったことはすでに述べた。教皇庁は国際的組織であるがゆえに外国人教皇が生まれるのは不思議なことではなかった。故郷を近くに有する神聖ローマ帝国皇帝カール五世(あとでの一般的呼称より)の存在なしには生じなかつた事態かもしれない。両人は古くからの知り合いであった。ルーヴァン大学出の教皇の学識は高かったが、イタリアの社会、文化事情に通じていなかった。ヒューマニストたちに人気であったメデイチ家初の教皇レオー十世のあとを襲ったため、ローマで極端に不人気であり、一日も早い代替わりが望まれていた。後継者は再び、前出のメデイチ家教皇クレメンス七世となった。ゴリッツの仲間、同士たち(sodalas)、『コリュキアナ』圏にも外国人教皇への憎悪が皮肉を込めて詩行に残されている¹⁵。それはまさしくXenophobiaと呼ばれよう。

ルネサンスに入り、都市ローマ自体が変貌を遂げつつあったことは指摘しておかなければならないだろう。一六世紀前半期は古代ローマの建築家ウィトルウィウスの俗語訳が現われ、ラファエッロはその一書を保持していた¹⁶。この古典は建築論に留まらない豊潤な内容を持つ驚嘆の書である。ラファエッロはローマの都市計画に参与し、発掘が盛んとなった古代ローマへの考古学的興味を失わなかった。早世(一五二〇年)が惜しまれたラファエッロであるが、ローマ劫略に遭遇しなかつたことは仕合せであったかもしれない。それは急逝数年後に勃発している。ゴリッツとその仲間は常にサンタゴステイノ聖堂内でこの秀逸な画家の絵「預言者イザヤ」を前にしていたのであった。ローマ暮らしの折、何度も見たこの壁画は先の彫刻群を見下ろす形で描かれている。ヨローツパの「地理上の発見」をエジディオの視点で語りうる意味でも重要画である¹⁷。



(三) コロッチとヴィダ、グリマルデイ、オルシーニ

ゴリッツの活動圏にいた、同じく教皇庁聖職者、既出のコロッチの名も不十分ながら小著『ルネサンス文化人の世界』で言い添えることができたが¹⁸、本論でかなり彼を詳らかにして行こう。ハドリアヌス六世登位に憤激した詩歌を集めたものこのコロッチであった¹⁹。こ

こには筆まめな知的編集者、好奇心に富む情報家のコロッチの姿がある。先のウイトルウィウスの俗語訳でラファエッロのために貢献したのも、このコロッチであった。バルダツサーレ・カステイリオーネとラファエッロの関係は知られているところだが、コロッチと画家の親密度はもつと知られてよい²⁰。

トレント公会議を見届けた同時代人ミケランジェロ（一四七五・一五六四）には叶わないにしろ、一五世紀後半から一六世紀半ば頃までに及ぶコロッチ（一四七四・一五四九）の長い生涯は、ローマ劫略やトレント公会議の始まりにも遭遇し、ルネサンス文化全般を窺うに足るに十分である²¹。その長命から、さらに浮かんてくる適切な人物は少なくない。ゴリッツ圏、『コリュキアナ』のアカデミーと、コロッチの交遊圏、コロッチ・アカデミー²²双方にいたマルコ・ジローラモ・ヴィダ（一四八五・一五六六）はどうだろうか。聖職者ヴィダはイエスの一家をラテン叙事詩化する『クリステイアド』（*Christid*、キリスト物語）を著わし、学芸の復興者としての二人のメデイチ教皇にこれを捧げている²³。これは当時の人気作品となった。

またヴィダは養蚕にも関心を抱き、これを作品化（『蚕飼育』*Bombicum*）している。詩作の背景に文化・思想圏としては農牧、農耕に関わる古代からの伝統的な詩文学がある一方で、実際に当時のイタリアで養蚕業や絹織物業が盛んになりつつあったことも見逃せないだろう。この作品もまた広く読者を獲得し、日本の「キリシタンの世紀」を考察するうえで一段と興味惹かれるものがある²⁴。「絹」問題には幕末以来戦前まで極めて高い社会性があり、日本の対外関係を考える視点となりうる。このことはグローバル化される世界にあった、当時の「キリシタン世紀」日本でも変わらなかった。多角的な貿易関係にあった絹を握る品目であったことはよく知られている。この点は

また後述することになる。

コロッチとともに名を挙げたい、類似の文化人はまだまだ存在する。ルネサンスは豊かな実りを收藏家たちにもたらし始めていた。「盛期」ルネサンスと言われる所以がここにある。愛書家として知られるコロッチは、新登場した活版印刷のもたらす *incunabula* に留まらず、手書きの原本や写本を含めて諸書蒐集に熱意を示した。それは今日ヴァティカン図書館の收藏の一部を形成している。このような蔵書家の類いに、同様にヴァティカン図書館などに收藏されることになるサンマルコ聖堂の枢機卿ドメニコ・グリマーニ（一四六一・一五二三）やフルヴィオ・オルシーニ（一五二九・一六〇〇）がいて名高く、好んで彼らの文化活動が関連づけられ、比較される。

グリマーニはその古典的研究によれば²⁵、芸術品を含む古代の品々だけでなく、当代物、即ち現代作品にも理解があり、一四七五年生まれのミケランジェロや一四八三年生まれのラファエッロとの浅からぬ関係が指摘されている。ヴェネツィア共和国は滅亡した東ローマから哲学に通じた神学者ベッサリオンを迎え、携えて来たその蔵書は垂涎の的となった。ヴェネツィア共和国の有力家門の出であるグリマーニはむろんベッサリオンの私蔵書にも注目している。神学と哲学に明るいグリマーニはプラトン主義に関心を示し、この期の靈魂不滅論争に通じていた²⁶。この点でマルシリオ・フィチーノやボンポナツツイという論者たちとの関係が問題になる。またフィレンツェのメデイチ家お気に入りのアンジェロ・ポリツィアーノとジョヴァンニ・ピッコ・デッラ・ミランドラによるヴェネツィアを含む北イタリアでの書物探索の旅は歓迎するところであった。若死にするピーコの蔵書はグリマーニが求めることとなる。

オルシーニ家はローマの名門中の名門だが、メデイチ家と婚姻関係

に入ったことはすでに述べた。ロレンツォ・イル・マニフィコの長子ピエロも父同様にオルシーニ家から嫁をもらっているので、二代続いたことになる²⁷。フルヴィオはローマ劫略のあとに生まれた新世代のヒューマニストで、その熱心な諸々の蒐集活動にはコロッチの影響が及んでいる。若いフルヴィオは老コロッチと会い、この思い出を終生大事にした。トレント公会議世代として、「教会画家」ミケランジェロや「偉大」な枢機卿アレッサンドロ・ファルネーゼとは近しかったが、特に後者の蔵書がフルヴィオを惹きつけたのである²⁸。教皇パウルス三世の孫、同名のアレッサンドロ・ファルネーゼはイエズス会との関係も深く、天正遣欧使節来伊の折の最も目立つ教会人であった。ローマに向かう途次、カブラローラにあるファルネーゼ家の広大な別邸に同使節は立ち寄っている。

(四) イエージの人アンジェロ・コロッチとその多様な活動

ここからさらにコロッチに的を絞ってみよう。まずは出身地のイエージだが、マルケ州にあり、同州の県都はアンコーナである。アンコーナはアドリア海に面し、イエージは内陸部にある。音楽好きな方にはよく知られているようだが、ジョヴァンニ・バッティスタ・ベルゴレージ（一七一〇・一七三六）を生んだ町である。ただし日本でコロッチよりもベルゴレージのほうが名が通っていると言いつける自信はない。むしろ、中世の神聖ローマ皇帝フェデリーコ（フリードリヒ）二世が一一九四年仰々しく生まれた町、と言ったほうが通りがよいかもかもしれない。

コロッチの生年に関しては幾つかの見方がある。特に一四六七、一四六九年説は有力であった。イエージで一四六九年に開催されたシンポジウムは多分にこの両説を意識していたであろう。このシンポジウ

ムではコロッチ研究の第一線にいた学者たちが参集して口頭発表を行い、これはのちに論集として公刊された²⁹。この論集に三本も載っている学者がサミー・ラッテス (Samy Lattes) であるが、ラッテスが一次史料から見出した箇所によると、生年月日は一四七四年七月二四日である。これは長年コロッチ研究を導いてきたヴィットリオ・ファネッリ (Vittorio Fanelli) が論集の巻頭論文で指摘しているところである³⁰。イエージ市の公式ホームページでは一四六七年となっている。実はこの生年は、後述のルドヴィーコ・ラッザレリとの関係でも注目されるので、あとでまた言い及ぶことになろう。この期のヒューマニストの生年が動くのは珍しいことでなく、エラスムスやフェードラ・インギラーミなどが直ちに浮かんでくる³¹。

古典籍、自筆本、古物、芸術品、コインなどの蒐集への熱意とともに、古代の「度量衡」への関心が高かったことはコロッチ資料から分かっている³²。古代ローマの長さの単位ピエーデ (ピエーデー) の解明は建築のオーダーとも関連していた。ヨーロッパとは異なる背景があるが、長さや重さへの探究心は本邦の狩谷掖斎を彷彿とさせずにはおかない。掖斎は『本朝度量権衡攷』の作者として知られる江戸期の文人である。文献学者たることがコロッチ同様の好奇心を掻き立てずにはおかなかつたであろう。文献学に寄り道を許してもらえらるなら、次の言を引用しておこう。コロッチらと近似の書誌学者川瀬一馬は、日本思想史の開拓者「村岡(典嗣)博士が、本居宣長を位置付けたドイツ文献学に適った江戸時代の学者は、実は狩谷掖斎に置き換えることが適切かと考える次第であります」と³³。このような文献学は、宣長に示されるごとく彼我を問わず言葉・言語研究を抜きには語れないだろう。

言語学分野がまたコロッチの場合、極めて注目される。ラテン語、

ギリシア語などの古典語に限らず、俗語イタリア語と同系統のロマンス語諸語（プロヴァンス語も含まれる）に並みならぬ討究心を寄せた点で比較言語学者を思い起こさせるところがあるからである³⁴。コロッチの俗語問題は当然のことながら散文をめぐって同時代人の枢機卿ベソとの関連、比較が可能である³⁵。ダンテと同時代のトスカーナ人フランチェスコ・ダ・バルベリーノ（トスカーナはBarberino Val d'Elsa生まれ）へのコロッチの関心はその一環であり、トスカーナ語の起源が問われたのであった。興味深い話がある。ヴァティカンの主となっていた、バルベリーノ家出身のウルバヌス八世（在位一六二三・一六四四、一五六八・一六四四）は先祖にこの著名な詩人を求め、俗語研究に理解を示しているからである³⁶。ウルバヌス八世は、ルネサンス文化を超出して豪華絢爛な町となっていくバロック期のローマ教皇だが、まだまだ日本キリシタン史と無縁の教皇でなく、注目に値する³⁷。

コロッチは以上のように千篇一律のヒューマニスト像を改めさせるほどの多彩な顔を持っていた。また一種のアカデミーが古代ローマの歴史的地区クイリナーレの自邸に形成されていた。このアカデミーに先行する、あるいはまた同時代に並行してあった他のアカデミーがローマでは知られている。特に一五世紀のボンポニオ・レトのアカデミーは名高く³⁸、コロッチがこの後継者のように見えてくるが、性格の異なる点も多い。異教性が高かった先行アカデミーは教皇パウルス二世の時抑圧され、一四七九年、シクストゥス四世の時に再建された。レトラはローマ建国をパリア（Palia）祭として毎春祝った。

コロッチの周囲に集まる交流の場では中心人物の人となり魅惑されていたと言えよう。この点ではレト時代と変わらないにしろ、このアカデミーでコロッチに会おうとして、書き上げた作品を献呈する者にも事欠かなかった。われわれはそのような可能性を持ったひとり

にラツザレッリを加えることができる。伝統あるローマ・アカデミーに出入りしたヒューマニストたちに少なからざる知人をも見出していたはずだ³⁹。

（五）サンセヴェリーノ・マルケの人ラツザレッリと彼の「蚕の詩」

ラツザレッリのコロッチとの決定的接点を求める前に、生地と教育、そして生年を記したい。まず生地だが、コロッチと同じマルケ州ということになる。県都はマチェラータである。やはりサンセヴェリーノは内陸部である。マチェラータ生まれで日本キリシタン史と関係が浅くないイエズス会士と言えば、マッテオ・リッチがいる。明朝で利瑪竇の名で知られる重要人物である。地方色が独特に働くイタリアにあつてはこのマルケのことはまだまだ知る必要を覚えている。ラツザレッリの学習環境は先ずは地元であり、父親を早くに喪っているが、恵まれた教育を受けられたことはまちがいない。これには母方の力が働いているように思われるし、兄弟たちや親族も知的に活躍している。そのなかで若くして詩人となったラツザレッリの才能は群を抜いていた。一四六八年、来伊していた神聖ローマ皇帝フリードリヒ三世によつて桂冠詩人となり、脚光を浴びた。自らこのことを『キリスト教祭暦』(Fest. Christianae Religionis) に誇らかに詩行としている⁴⁰。非常に若くして古典語ができ、古典詩に通じていた証しである。この大著はカメリーノ公爵ダ・ヴァラノ家からの恩顧を契機とする。カメリーノもまたマチェラータ県に属する。また数学と占星術を学んでいるが、これらの学問は密接に関わり、また占星術は天文学としばしば混同された。日常のうえでも暦学のうえでも星占いは不可欠の知識であり、宮廷や社会で恩顧を受けるための必要な手段とも化していた。さて、肝心の生年はいつなのか。桂冠詩人となったのは幾つの時だ

ろうと誰しも思う。ラッザレツリの生年は一四五〇年説が取られてきたが、ヴァティカン図書館所蔵写本であるラッザレツリ自身の「蚕の詩」(Bombix)から一四四七年説が有力になった⁴¹⁾。いずれでも若い。そして、この作品こそが彼とコロッチを結び付けているのである。「蚕」(Baco da seta)が吐き出す絹が日本史上、世界を睨んだ貿易で重要になった時代が近年の一九世紀後半からの一世紀と、遠き世の一六世紀後半からの「キリシタンの世紀」にあった。ここで問題になるのは、もちろんルネサンス時代に相当する後者である。絹の元になる「蚕」が如何なるイメージで描かれているのかを知る好材料ともなっている作品が「蚕の詩」である。研究者ゲオルク・レッレンブレクはラッザレツリのこの作品を校訂するとともに、先述のヴィダの同類作品などとの比較を行う有意義な論考を発表している⁴²⁾。

ラッザレツリはヘルメス主義者、カバラ主義者として、フィチーノやピーコのルネサンス哲学思想圏に位置付けられる重要人物である。またフィチーノやピーコにはない錬金術にも一家言を有していた。献呈を受けたコロッチにはこれらが欠けているので、ヒューマニズムと哲学の伝統の相違がここにはあるだろう。そして哲学のほうはルネサンスからギリシア語理解の必要度が急速に高まった。コロッチの言語能力としてギリシア語がいかほどのものだったのか、その見方が研究者によって分かれているが、少なくともラテン語ほどではなかったであろう。またヘブライ語も難しかったろう。これに対してラッザレツリは、ラテン語はもちろんだが、ギリシア語、ヘブライ語とも出来た。プラトン主義関連文献のギリシア語からラテン語への翻訳活動の中心地はフィレンツェにあり、フィチーノが活躍していた。このフィチーノとラッザレツリの間には交流の接点が見られない⁴³⁾。ヘルメス・トリスメギストスが作者とされる『ヘルメス文書』(Corpus

hermeticum. *Hermetica*)をともに訳出しているだけに不思議である。ただしラッザレツリはフィチーノの仕事を知っていた。フィチーノの『ヘルメス文書』翻訳は二四七一年トレヴィーゾで印刷された⁴⁴⁾。『ヘルメス文書』全体が『ピマンデル(ポイマンドレス)』の名で広がる最初のきっかけとなった。翌年はフェツラーラで出る。フィチーノの仕事では最も版が出回った印刷本で知られ、この後も勢いは世紀を越えても止まなかった。また写本も多い。北伊に拠点がしばしばあったラッザレツリには入手可能であったろう。この文書はキリスト教と対比されて解釈され続け、一六世紀の七、八〇年代、枢機卿グリエルモ・シルレトなどがいる教皇庁内でヘルメス思想の諾否をめぐり、問題にならざるをえなかった⁴⁵⁾。日本人までがローマに来たこの時代、「異教」の文化や思想がどのように判断されていたかは常に知るに値する事柄であろう。

ラッザレツリの書き著した著述から、北のヴェネツィア共和国、フェツラーラや中部イタリアのウルビーノなどの領主国とは親密度が高く感じられる。ヴェネツィア共和国内の大学町パドヴァ、エステ家のフェツラーラ、同じく領主国のゴンザーガ家のマントヴァなどは北伊の生まれで自らも領主の血を引くビーコの地域でもあったと言える。一四六三年生まれで、同じく早熟であったビーコとの接点が目される。ウルビーノ公国はラッザレツリの故郷から地域的に近いものがあったろう。南のナポリ王国ではさらにその関係度が強まり、ヒューマニストたち、特にジョヴァンニ・ジョヴィアノ・ポンターノはナポリ王とともにラッザレツリの対話(Crater *Hermetis* 『ヘルメスのクラテール(混酒器)』)に登場してくる。ポンターノは一四八六年にローマで実際にコロッチと会っていると考えられている。人物としては『ヘルメスのクラテール』に出てくるが、ラッザレツリよりもコロッチの

ほうと親しく、大物ヒューマニストの官僚ポンターノとコロッチは誼が通じていたようだ。

ラッザレツリの厚誼関係を見ていく場合にはこのナポリ王国の広がりを見野に収めておいたほうが良いだろう。アブルツォではナポリに端を発するアトリ公爵アクヴィヴァ家から恩顧を受けている。この一族からはやがてイエズス会総会長が出、日本キリシタン史上も関係が深い。またアブルツォ出身と言えば、日本キリシタン史では忘れ難い、キエティ生まれのアレッサンドロ・ヴァリニャーノがいる。ラッザレツリと世界、その思想圏を考えれば、マルケ州とともにアブルツォ州の認識をも深めなくてはならない。

著書（手書き本）によっては君主への献呈先はしばしば変わった。当てにしていたが、亡くなったり、政変が起こり、別の権力者へ変わったりと慌ただしい。一四九〇年代に入ると、フランス国王シャルル八世がアルプスを越えてイタリアに入り、半島を縦断してナポリ王国を奪取しようとする遠征が起こった時期であった。時にラッザレツリはフランス王に献呈しようとする。

一五世紀は終末論が勢いを増した時代でもあった。預言者のジョヴァンニ・メルクリオ・ダ・コレツジョが現われたのは八〇年代からであり、メルクリオ（ヘルメスのこと）の行動は世紀を越えてフランスに移り、その足跡が記されることになる。このメルクリオを一段と支持し、師と仰いだのがラッザレツリであった⁴⁶。ローマではメルクリオは教皇シクストゥス四世に親しくまみえることができた。そしてこの人物の傍には必ずラッザレツリがいた。ヘルメス主義者ラッザレツリにとり、師はメルクリオ（ヘルメス・トリスメギストス）であり、弟子ピマンデルたる自分を「再生」（regeneratio）させてくれた特別な存在である⁴⁷。

ピーコがこのローマに現われるのも近い時代のことであるが、ラッザレツリとピーコの接触可能性はまだ明らかになっていない。師メルクリオと弟子ラッザレツリはフィレンツェにも入京しようとしたが、果たせなかった。フィレンツェではピーコの友サヴォナローラが主導する時代（一四九四・一四九八）となり、社会一般の風潮が世の終わりの様相を呈し始めていた。

さて「蚕の詩」初版（editio princeps）は一四九八年⁴⁸、ローマにおいてである。刊行されたときはもうとつくにコロッチは子どもでもないし、ラッザレツリのほうはもう生の終末に差し掛かっている。亡くなったのはその二年後、故郷においてである。随分前にこの詩ができあがっていたことはまちがいない。書き物によっては献呈先が変わることが多く、情勢を見極める必要があったのに対し⁴⁹、肝心の「蚕の詩」はコロッチと変わっていない。コロッチは君主ではなく、しかも貴族の出とはいえどもまだ「子供」（puer）とある⁵⁰。よほどのことがない限り、恩顧がじかに期待できる年齢ではない。これらからコロッチの生年問題が浮上するのである⁵¹。ラッザレツリはわれわれのコロッチの誕生前後から、有力一門コロッチ一家の愛顧を受けていたと目される。同じマルケの出でもある。生誕を祝して将来を見込んで書かれたのかもしれない。ヒューマニストたちの自筆原稿の愛好者となるわれらのコロッチだが、周囲が大事にしまっておき、印刷が遅くなっただけのことかもしれない。おおかたはローマ・アカデミーでのアンジェロ・コロッチの活動以前に遡るのだろう。

「蚕の詩」は蚕が変態、成長していくように、ラッザレツリは子供のコロッチの健やかな成長を望んだに違いない。それが二五〇行を越す詩行から読み取れる。このように日々の生活とリズムが無理なく謳われる作品は同時代に見られた。先述のレッレンブレクは実例作を挙

げてこの点を指摘している⁵²。作品を読むことが学習ともなり、訓戒ともなるということがあったであろう。他方で、蚕の成長とその意味合いの考察には独自の点があり、ラッザレツリの作品はヴィダなどの作品に繋がる嚙矢となったと見られよう。そしてそこにはラッザレツリ独自の思想が盛り込まれているのである。詩行に *paingencia* とある⁵³。再生であり、場合によっては転生である。キリスト教信仰に深く帰依していたラッザレツリにはイエスの甦りが念頭にあった。蚕の生態と蚕糸（絹糸）に繋がる過程が神秘的な宗教性を帯びて遍く変わらずに真理を語っているものとして解釈されている。この観点はラッザレツリが翻訳した『ヘルメス文書』第一六篇、そして『ヘルメスのクラテール』などにも窺うことができ、ラッザレツリの根本思想であった⁵⁴。

おわりに

まずは、本論はゴーリッツとコロッチを詳らかにすることによって、小著『ルネサンス文化人の世界』を補うことができた。ゴーリッツを語ることによってローマ劫略が言及された。この難に直面した文化人は多い。コロッチも例外ではない。コロッチに関しては研究上必要な重要文献が揃っていただけに、こうしてようやく論を組み立てられ、稀観書に責めを塞いだ気持ちになっている。

次に、フィチーノの文脈で語られることが多くヘルメス主義者と称せられるラッザレツリは、ハドリアヌス六世の教皇時やローマ劫略勃発時よりも二〇数年前に死去していた人物である。またゴーリッツやコロッチと違い、小著にその名は現れない。コロッチが資料文献の生きた蒐集家として、ある意味ラッザレツリとゴーリッツのそれぞれの世界を繋いでいる。研究面では、ゴーリッツはともかくも、ラッザレツ

リのほうが近年コロッチよりも明らかに進んでいる。ラッザレツリのその刊本状況が好転し、いずれの地域に住む場合でも研究者に接近しやすくなるとともに、専門研究者たちの成果が明らかになりつつある⁵⁵。この機に論点を示すことができたにしても、まだまだラッザレツリを総合的に描き切っていない、別稿が必要であろう。

「蚕の詩」というラッザレツリのイメージから離れた詩一編を特に問題にしている。これは生前印刷された、彼の唯一の作品であり、広範な人間関係を樹立したコロッチの名が現われる点で、きわめて興味深い資料となっている。それだけに本論ではラッザレツリとコロッチの関係とその詩の内容に幾らかなりとも迫ろうとした。幸いにも、養蚕の主題ゆえに「絹」の世界性まで言及ができた。別の小著『イタリアルネサンスとアジア日本』ではヴィダにこの方面の作品があると既述していた。ラッザレツリ以後のことであり、ヴィダはコロッチ圏に属している。本論ではこの小著の時よりかなり具体的になったのではなからうか。

絹の歴史は専門研究者たちにより文化的にも経済的にも明らかにされている。またそれらの著書も少なからず見いだされる。何度か指摘したように、ルネサンス時代に限らず、幕末以後の日本史において蚕種と絹糸が果たした役割はよく知られている⁵⁶。それは日伊の近代的历史を探ることともなる。興味深いことに、ラッザレツリのラテン語作品「蚕の詩」のイタリア語訳が二種類現われたのも、一九世紀のことであった⁵⁷。高まる関心が現代語訳を促したのではなからうか。

強調しておきたいのは、本論が扱った時代にあつて蚕がどのような精神的意義を有するかは未知のままだったということである。ところがルネサンス時代に重なるキリシタン世紀の日本では考えられない意味付けがラッザレツリによって為されていたのである。ただし、

影響を受けたであろうヴァイダの同主題の作品の精査が為される必要があるだろうし、蚕への思い、蚕に託する気持ちは今後とも調査を深めていくことが大事であろう⁸⁾。

注

- 1 根占献一『ルネサンス文化人の世界—人文主義・宗教改革・カトリック改革』知泉書館、二〇一九年二月二〇日第一刷。
- 2 根占献一『ロレンツォ・デ・メディチ』、南窓社、二〇二二年第三版。
- 3 Guido Pasolini, *Adriano VI, saggio storico con venti tavole ed un facsimile*, Roma, 1913, 132. 根占『ルネサンス文化人の世界』五七頁。この拙著頁のデ・ロヨラは索引から落ちてくる。
- 4 *Il Sacco di Roma del MDLIV*, Narrazione di contemporanei scelte per cura di Carlo Milanese, Firenze, 1867. フォレンツェの出版物 (volumetto) として、フォレンツェ人の有名、無名の同時代記録が収まっているが、注目したいのは、Sacco di Roma, ragnuglio storico attribuito a Jacopo Buonaparte である。編者の前置きによるが、一七五六年、Colonia 刊とあるが、おそらくはLuccaと。ルッカの印刷物は外国の都市刊行に擬することが珍しくなかった世紀であり、またBuonaparteの名が意味深い。やがて皇帝ナポレオンの妹Elisa Bonaparte Baciocchiが統治に来るルッカである。
- 5 Léon Dorez, *La cour du Pape Paul III d'après les registres de la thesorerie secrète*. Préface par Pierre de Nolhac, tome premier, La cour pontificale, Paris, 1932, 89, 245.
- 6 根占『ルネサンス文化人の世界』、「第六章 ガスパロ・コンタリーニの思想と行動」を参照のこと。
- 7 Pietro de Leturia S. J., Origine e senso sociale dell'apostolato di S. Ignazio di Loyola in Roma, in *Miscelanea Pio Paschini, studi di storia ecclesiastica*, Roma, I, 223-249.
- 8 根占『ルネサンス文化人の世界』、一一一、一三九、一四〇頁。なおヨハンネス・ゴーリッツの人名表記に揺れが拙著に生じているが、Paolo Pellegrini, *Piero Valeriano e la tipografia del Cinquecento. Nascita, storia e bibliografia delle opere di un umanista*, Udine, 2002, 141にはゲーリッツ (Göriz) とあり、
- 9 変わりがない。ただ同一書では統一がなされるべきであった。
Coryciana, Epigrammata, 1524: introduction, texte, traduction et notes, éd. Lyda Kalen, Paris, 2020.
- 10 Meyer Schapiro, Leonardo and Freud: An Art-Historical Study, in *Renaissance Essays from the Journal of the History of Ideas*, edited Paul O. Kristeller and Philip P. Wiener, New York, 1968, 303-336, especially 315-328. この論文初出は一九五四年。
- 11 Josef Jusewijn, Poetry in a Roman Garden: The Coryciana, in *Latin Poetry and the Classical Tradition. Essays in Medieval and Renaissance Literature*, edited by Peter Godman and Oswyn Murray, Oxford, 1990, 211-231.
- 12 根占献一『イタリアルネサンスとアジア日本—ヒューマンリズム・アリストテレス主義・プラトン主義』知泉書館、二〇一七年、一三七頁。
- 13 Julia Haig Gaisler, The Rise and Fall of Goritz's Feasts, in *Renaissance Quarterly*, XLVIII, 1, 1995, 41-57.
- 14 Pio Pecchiai, *Roma nel Cinquecento*, Storia di Roma XIII, Introduzione di Pietro Tacchi Venturi S. J., Bologna, 1948, 391. トーリッツはイタリヤ語表記ではIl Coricio (Giovanni Goritz) である。なおこの概説的大作はハドリヌス六世の登位から始まる。またアレクサンドロ・ヴァリニャーノの名や日本が出てくる。面白くないのは、the principi giapponesi convertiti e battezzati とあり、四名となっている。これは公式謁見の場に伏していた中浦シヅリアンが参列しついでなかったためである。Pecchiai, *ibid.*, 146. Pio Paschini, *Roma nel Rinascimento*, Storia di Roma XII, Bologna, 1940, 439-440.
- 15 Pasolini, *op. cit.* 124-126. □括弧は Pierio (Piero) Valeriano と言えらるだろう。ヴァレリアーノについては、根占『ルネサンス文化人の世界』、第五章、参照のこと。
- 16 1514, 15 agosto - Lettera a Marco Fabio Calvo, in Vincenzo Golzio, *Raffaello nei documenti nelle testimonianze dei contemporanei e nella letteratura del suo secolo*, Città di Vaticano, 1936, 34-36. シンプナト・ヴィテリウス 一文から「悲劇」的畫面を引き出した可能性は、Frederick A. de Armas, *Cervantes, Raphael and the Classics*, Cambridge U. P., 2010 (1998), 54-55.
- 17 根占『イタリアルネサンスとアジア日本』、一三八、一三九頁。David Rijser, *Raphael's Poetics: Art and Poetry in High Renaissance Rome*, Amsterdam,

ヨハン・ゴーリッツのコリュキアナ、アンジェロ・コロッチのアカデミー、ルドヴィーコ・ラッザレリ「蚕の詩」—ルネサンス思想圏と世界

- 2012.
- 18 根占「ルネサンス文化人の世界」, iv頁。また同書第五章では「コロッチ, ゴーリッツらに言及している。
- 19 所収されている書物は長々題名だが、厭わず記してみたい。『*Poesie italiane, e latine* di Monsignor Angelo Colocci con più notizie intorno alla persona di lui, e sua famiglia, raccolte dall'abate Gianfrancesco Lancellotti e dal medesimo dedicate eminentissimo e reverendissimo principe il Signor Cardinale Mario Compagnoni Marefoschi, Jesi, 1772. Vittorio Fanelli, *Ricerche su Angelo Colocci e sulla Roma cinquecentesca*. Introduzione e note addizionali di José Ruyschaert. Indici di Janni Ballistreri. Città di Vaticano, 1979, 3044 (Adriano VI e Angelo Colocci).
- 20 Ingrid D. Rowland, Raphael, Angelo Colocci, and the Genesis of the Architectural Orders, in *Art Bulletin*, Volume 76, Number 1 (Mar. 1994), 81-104. Ed., *The Culture of the High Renaissance. Ancients and Moderns in Sixteenth-Century Rome*. Cambridge U. P., 1998. ローランドの鋭利な研究や以下の細かな研究書を比較参照のつもり。小佐野重利・姜雄編『ラファエロと古代ローマ建築―教皇レオ十世宛書簡に関する研究を中心』中央公論美術出版、一九九三年。
- 21 Romeo de Maio, *Michelangelo e la Controriforma*. Firenze, 1990 (1978), 374-375. コロッチのミケランジェロ観が指摘されている。チ・マイオには数多くの著作があり、そのなかで日本キリシタン史の文献に言及することが少なくなく、注目される。
- 22 *Poesie italiane, e latine* di Monsignor Angelo Colocci [el raccolte dall'abate Gianfrancesco Lancellotti, 18, in Memorie intorno alla persona di Monsignore Angelo Colocci e sua famiglia.
- 23 Marco Girolamo Vida, *Christiad*, translated by James Gardner. Cambridge U. P., 2008.
- 24 根占「イタリアルネサンスとアジア日本」, 一五一頁。
- 25 Pio Paschini, *Domenico Grimani, Cardinale di S. Marco* (41523), Roma, 1943, 150.
- 26 Aubrey Diller, Henri D. Saffrey, Leendert G. Westerink, *Bibliotheca Graeca Manuscripta Cardinalis Dominici Grimani (1461-1523)*, Mariano del Friuli, 2003, 83-85. Paschini, *op. cit.*, 129. 靈魂不滅の世界性に関しては、根占献「東西の歴史的邂逅における靈魂不滅の問題―ルネサンス・プラトン主義の視点から」『学習院女子大学紀要』第二十五号、二〇一三年、二五九・二七九頁。
- 27 Alison Brown, *Piero di Lorenzo de' Medici and the Crisis of Renaissance Italy*. Cambridge U. P., 2020.
- 28 Pierre de Nolhac, *La bibliothèque de Fulvio Orsini*. Genève, 1976, 5-16. 初版 45 Paris, 1887.
- 29 *Atti del convegno di studi su Angelo Colocci*. Jesi, 13-14 settembre 1969 Palazzo della Signoria, Amministrazione comunale di Jesi, 1972. Roberto Weiss の発表者だったのかを知らなそう。Ibid., 10. 一九六九年に急逝している。その前年に出た Roberto Weiss, *The Renaissance Discovery of Classical Antiquity*. Oxford, 1968 245 Angelo Colocci の名がマナーチカン図書館所蔵資料から出てくる。
- 30 Vittorio Fanelli, La fortuna di Angelo Colocci, in *Atti del convegno*, 19 n.l. の論文で、Id., *Ricerche su Angelo Colocci e sulla Roma cinquecentesca*, 168-181, にも所収されている。
- 31 根占「ルネサンス文化人の世界」, 四二、一八一頁。
- 32 Samy Latès, A proposito dell'opera incompiuta "De ponderibus et mensuris" di Angelo Colocci, in *Atti del convegno*, 97-108.
- 33 川瀬一馬「日本における書籍蒐蔵の歴史」, スリカン社、一九九九年、一〇九頁。なお同書、一〇二頁も参照。
- 34 *Angelo Colocci e gli studi romanzzi*, a cura di Corrado Bologna e Marco Bernardi. Città di Vaticano, 2008. 二〇本以上の論效が収められている。『コロッチ蔵書の特長を明らかにされた』。
- 35 Vittorio Gian, *Un decennio della vita di M. Pietro Bembo (1521-1531)*. Appunti biografici e saggio di studi sul Bembo con appendice di documenti inediti. Torino, 1885, 64-79.
- 36 Federico Ubaldini, *Vita di Mons. Angelo Colocci*. Edizione del testo originale italiano (Barb. Lat. 4882), a cura di Vittorio Fanelli. Città di Vaticano, 1969. premissa で、マナーチカンが指摘している。マナーチカン・ウバルディーニ（一六一〇-一六五七）の伝記はラテン語版のほうは、一六七三年にローマで印行された。

- 37 『新カトリック大事典 (New Catholic Encyclopedia)』 学校法人上智学院新カトリック大事典編集委員会 (代表高柳俊一) 研究社、一九九六年、第一巻。ウルバヌス八世も立項 (磯見辰典) されているもの (この) でも問題を抱え、「日本のカトリック」事典とは思えない叙述に徹している。石鍋真澄『ルネーニーバロック美術の巨匠』吉川弘文館、二〇一〇 (一九八五) 年、ローマの都市美観化に寄与したルネーニー (一五九八・一六八〇) とともに教皇ウルバヌス八世を鮮明な人物像に仕立てている。なお、石鍋には次の書もあり、本論に資するところ、少なくないだろう。『教皇たちのローマ—ルネサンスとバロックの美術と社会』、平凡社、二〇一〇年。
- 38 根占「ルネサンス文化人の世界」、四三頁、など。
- 39 Angela Frisen, Ludovico Lazzarelli's *Fasti Christianae Religionis*: Recipient and Context of an Ovidian Poem, in *Myrica*. Essays on Neo-Latin Literature in Memory of Jozef Jisewijn, edited Dirk Sacré and Gilbert Tournoy, Leuven University Press, 200, 115-132.
- 40 Ludovico Lazzarelli, *Fasti Christianae Religionis*. Testo edito per la prima volta, corredato di apparato critico e di introduzione a cura di Marco Bertolini, Napoli, 1991, 516.
- 41 Maria Paola Sacci, *Ludovico Lazzarelli da Ellicona a Sion*, Roma, 1999, 21. *Poesie italiane, e latine di Monsignor Angelo Colocci* [el raccolte dall'abate Gianfrancesco Lancellotti, 49, in testimonianze onorevoli di diversi autori intorno alla persona, ed agli scritti di Monsignor Angelo Colocci.
- 42 LUDOVICI LAZZARELLI SEPTEMPEDANI BOMBXYX AD AN. COLOTUM HONESTAE INDOLIS PUERUM, in Georg Roellenbeck, Ludovico Lazzarelli. Opusculum de Bombyce, in *Literatur und Spiritualität*. Hans Sckommodau zum siebzigsten Geburtstag, München, 1978, 213 - 231. 特頁225-231. ロッチナガ「子供」の書。その以下の巻の所収。など。Ludovico Lazzarelli, *Opere ermetiche*, a cura di Claudio Moreschini, Maria Paola Sacci, e Fabio Troncarelli. Edizione nazionale delle opere di Ludovico Lazzarelli I, Pisa e Roma, 2009, 99-109. 特頁105-109, 146-147.
- 43 Paul Oskar Kristeller, Marsilio Ficino e Ludovico Lazzarelli. Contributo alla diffusione delle idee ermetiche nel Rinascimento, in Id., *Studies in Renaissance Thought and Letters*. Roma, 1969, 221-247. Id. Ancora per
- Giovanni Mercurio da Correggio, in *ibid.*, 249-257. 上の両論文の初出はそれぞれ一九三八・一九四一年である。
- 44 MERCYRII TRISMEGISTRI LIBER DE POTESTATE ET SAPIENTIA DEL PIMANDER. Riproduzione anastatica dell'edito princeps, Treviso, Gerart van der ley, 1471, a cura del lessico intellettuale europeo Centro di Studi del C.N.R., Firenze, 1989.
- 45 Frederic Punell, Jr., The Hermetist as Heretic: An Unpublished Censure of Foix de Candale's *Pimandre*, in *Supplementum Festinum*. Studies in Honor of Paul Oskar Kristeller, edited by James Hankins, John Montasani, and Frederic Punell, Jr., New York, 1987, 525-533.
- 46 根占献「フイチーノとルメス—ルネサンス・ルメティスム研究」早稲田大学大学院『文学科研究紀要』別冊六、一九七九年、二〇七-二一六頁。
- 47 Kristeller, Marsilio Ficino e Ludovico Lazzarelli, 239-240.
- 48 Sacci *op. cit.*, 56, 149-150年頃と推定。一四九五・一五〇〇を始め、多様な刊行年の提案に關しては Lazzarelli, *Opere ermetiche*, 99 n.1
- 49 Frisen, *op. cit.* ではラッザレリ「キリスト教祭曆」(*Fasti Christianae Religionis*) の変遷などが丹念に調べ上げられている。注三九に挙げた通り、今日、大作は刊本化されている。明らかにオウイティウス『祭曆』(*Fasti*) に倣ったものである。
- 50 Sacci *op. cit.*, 56, 146-147年説を採用している。
- 51 Lazzarelli, *Opere ermetiche*, 100-101, 147, 一四七四年説を固執している。その指す年齢が思ひより高く、一七歳や十八歳はたまたま指すに指摘される。
- 52 Roellenbeck *op. cit.*, 218.
- 53 LUDOVICI LAZZARELLI SEPTEMPEDANI BOMBXYX, 230.
- 54 Sacci *op. cit.*, 55-56. Lazzarelli, *Opere ermetiche*, 101, 147, 148, 149, 150, 151, 152, 153, 154, 155, 156, 157, 158, 159, 160, 161, 162, 163, 164, 165, 166, 167, 168, 169, 170, 171, 172, 173, 174, 175, 176, 177, 178, 179, 180, 181, 182, 183, 184, 185, 186, 187, 188, 189, 190, 191, 192, 193, 194, 195, 196, 197, 198, 199, 200, 201, 202, 203, 204, 205, 206, 207, 208, 209, 210, 211, 212, 213, 214, 215, 216, 217, 218, 219, 220, 221, 222, 223, 224, 225, 226, 227, 228, 229, 230, 231, 232, 233, 234, 235, 236, 237, 238, 239, 240, 241, 242, 243, 244, 245, 246, 247, 248, 249, 250, 251, 252, 253, 254, 255, 256, 257, 258, 259, 260, 261, 262, 263, 264, 265, 266, 267, 268, 269, 270, 271, 272, 273, 274, 275, 276, 277, 278, 279, 280, 281, 282, 283, 284, 285, 286, 287, 288, 289, 290, 291, 292, 293, 294, 295, 296, 297, 298, 299, 300, 301, 302, 303, 304, 305, 306, 307, 308, 309, 310, 311, 312, 313, 314, 315, 316, 317, 318, 319, 320, 321, 322, 323, 324, 325, 326, 327, 328, 329, 330, 331, 332, 333, 334, 335, 336, 337, 338, 339, 340, 341, 342, 343, 344, 345, 346, 347, 348, 349, 350, 351, 352, 353, 354, 355, 356, 357, 358, 359, 360, 361, 362, 363, 364, 365, 366, 367, 368, 369, 370, 371, 372, 373, 374, 375, 376, 377, 378, 379, 380, 381, 382, 383, 384, 385, 386, 387, 388, 389, 390, 391, 392, 393, 394, 395, 396, 397, 398, 399, 400, 401, 402, 403, 404, 405, 406, 407, 408, 409, 410, 411, 412, 413, 414, 415, 416, 417, 418, 419, 420, 421, 422, 423, 424, 425, 426, 427, 428, 429, 430, 431, 432, 433, 434, 435, 436, 437, 438, 439, 440, 441, 442, 443, 444, 445, 446, 447, 448, 449, 450, 451, 452, 453, 454, 455, 456, 457, 458, 459, 460, 461, 462, 463, 464, 465, 466, 467, 468, 469, 470, 471, 472, 473, 474, 475, 476, 477, 478, 479, 480, 481, 482, 483, 484, 485, 486, 487, 488, 489, 490, 491, 492, 493, 494, 495, 496, 497, 498, 499, 500, 501, 502, 503, 504, 505, 506, 507, 508, 509, 510, 511, 512, 513, 514, 515, 516, 517, 518, 519, 520, 521, 522, 523, 524, 525, 526, 527, 528, 529, 530, 531, 532, 533, 534, 535, 536, 537, 538, 539, 540, 541, 542, 543, 544, 545, 546, 547, 548, 549, 550, 551, 552, 553, 554, 555, 556, 557, 558, 559, 560, 561, 562, 563, 564, 565, 566, 567, 568, 569, 570, 571, 572, 573, 574, 575, 576, 577, 578, 579, 580, 581, 582, 583, 584, 585, 586, 587, 588, 589, 590, 591, 592, 593, 594, 595, 596, 597, 598, 599, 600, 601, 602, 603, 604, 605, 606, 607, 608, 609, 610, 611, 612, 613, 614, 615, 616, 617, 618, 619, 620, 621, 622, 623, 624, 625, 626, 627, 628, 629, 630, 631, 632, 633, 634, 635, 636, 637, 638, 639, 640, 641, 642, 643, 644, 645, 646, 647, 648, 649, 650, 651, 652, 653, 654, 655, 656, 657, 658, 659, 660, 661, 662, 663, 664, 665, 666, 667, 668, 669, 670, 671, 672, 673, 674, 675, 676, 677, 678, 679, 680, 681, 682, 683, 684, 685, 686, 687, 688, 689, 690, 691, 692, 693, 694, 695, 696, 697, 698, 699, 700, 701, 702, 703, 704, 705, 706, 707, 708, 709, 710, 711, 712, 713, 714, 715, 716, 717, 718, 719, 720, 721, 722, 723, 724, 725, 726, 727, 728, 729, 730, 731, 732, 733, 734, 735, 736, 737, 738, 739, 740, 741, 742, 743, 744, 745, 746, 747, 748, 749, 750, 751, 752, 753, 754, 755, 756, 757, 758, 759, 760, 761, 762, 763, 764, 765, 766, 767, 768, 769, 770, 771, 772, 773, 774, 775, 776, 777, 778, 779, 780, 781, 782, 783, 784, 785, 786, 787, 788, 789, 790, 791, 792, 793, 794, 795, 796, 797, 798, 799, 800, 801, 802, 803, 804, 805, 806, 807, 808, 809, 810, 811, 812, 813, 814, 815, 816, 817, 818, 819, 820, 821, 822, 823, 824, 825, 826, 827, 828, 829, 830, 831, 832, 833, 834, 835, 836, 837, 838, 839, 840, 841, 842, 843, 844, 845, 846, 847, 848, 849, 850, 851, 852, 853, 854, 855, 856, 857, 858, 859, 860, 861, 862, 863, 864, 865, 866, 867, 868, 869, 870, 871, 872, 873, 874, 875, 876, 877, 878, 879, 880, 881, 882, 883, 884, 885, 886, 887, 888, 889, 890, 891, 892, 893, 894, 895, 896, 897, 898, 899, 900, 901, 902, 903, 904, 905, 906, 907, 908, 909, 910, 911, 912, 913, 914, 915, 916, 917, 918, 919, 920, 921, 922, 923, 924, 925, 926, 927, 928, 929, 930, 931, 932, 933, 934, 935, 936, 937, 938, 939, 940, 941, 942, 943, 944, 945, 946, 947, 948, 949, 950, 951, 952, 953, 954, 955, 956, 957, 958, 959, 960, 961, 962, 963, 964, 965, 966, 967, 968, 969, 970, 971, 972, 973, 974, 975, 976, 977, 978, 979, 980, 981, 982, 983, 984, 985, 986, 987, 988, 989, 990, 991, 992, 993, 994, 995, 996, 997, 998, 999, 1000.
- 55 A Critical Edition of *De gentiliū deorum imaginibus* by Ludovico Lazzarelli edited and translated by William J. O'Neal, Lewiston and Queenstone, 1997. Wouter J. Hanegraaff and Rund M. Bouthoorn, *Ludovico Lazzarelli (1447-1500). The Hermetic Writings and Related Documents*, Tempe (Arizona), 2005. 最後の書に批判される。Ludovico Lazzarelli, *Testi scelti*, a

56 cura di Mirella Brini, Roma, 1955, 24-77. の仕事は出発点のひらき。
根占 献一に『The Travel Journals of Mathilde, Contessa Salier de La

Tour into the Interior of Japan, 1867-1870, edited and introduced by Giulio Antonio Bertelli, Eureka Press, c/o Edition Synapse, 2021, 2 vols の書評、『イ
タリア學會誌』第七二号、二〇二二年、一一七・一二八頁を参照のこと。

57 Lazzarelli, *Opere ermetiche*, 102.

58 伊藤智夫『絹』、法政大学出版局、二〇〇四年、I、二〇一・二二六頁。同
上、二〇〇六年、II、二九六・三〇六頁。こちらの各頁はイタリアに言
及している例である。伊藤は蚕具などの図、また蚕への思い、などにも
資料を挙げている。「蚕への思い」では、小論本文中の「蚕の詩」との彼
私の相違が明らかになる。なお、『*L'arte della seta in Firenze. Trattato
del secolo XV* pubblicato per la prima volta e dialoghi raccolti da Girolamo
Gargioli, volume unico, Firenze, 1868. 本書二卷は一九八〇年の復刊 (Cassa
di Risparmio di Firenze) による。博搜している伊藤の眼にこの書は触れな
かったようだ。

(本学名誉教授、星槎大学講師)

